

教員免許更新講習（小学校外国語活動）の課題改善と今後の展望

高野美千代

Issues and Prospects for the Teaching License Renewal Course at Yamanashi Prefectural University

TAKANO Michiyo

Abstract

This paper is to review the elementary teacher's training course in English, or the course for their teaching license renewal, at Yamanashi Prefectural University in August 2014. This paper also aims to discover how to improve the course content for the future courses. Each element in the one-day course is discussed and finally a possible plan for the next year is proposed.

キーワード：外国語活動、免許更新講習、小学校英語

はじめに

山梨県立大学では平成25年度、平成26年度に教員免許更新講習（小学校外国語活動）を実施した。26年度は2度目の開講となり、前回の反省を生かして、より現実的なニーズに合った講座を提供できるよう準備を進めた。国際政策学部所属する複数の教員の協力のもと、教育系学部を持たない山梨県立大学が地域の学校教育に寄与するための取り組みに臨み、その最大限の可能性を追求することを目指した。本稿では、このような意図に基づいて立案した講習プログラムの準備から実施までのプロセスを記録・検証し、さらなる課題解決の糸口を見出したい。

1. 講習プログラム作成について

1-1. プログラム内容の検討

平成25年度教員免許更新講習は本学における初めての実施であったこともあり、様々な反省点が課題として残った。¹⁾ 受講者（全3名）の講座に対する満足度は高く、ネガティブなフィードバックがあったわけではないが、実施する側として、のちに改善できる点を認識するに至った。

講習の内容は、学習指導要領に示された外国語活動の目標である3点、すなわち

- ①外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深める。
- ②外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。
- ③外国語を通じて、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる。

以上を踏まえて検討を進めた。

平成25年度の実施体制としては、山梨県立大学教員6名がそれぞれ1～2コマの講座を担当した。その意図は、各教員の個性を十分に生かしたうえで一貫性のある講座内容を提供しようということであった。しかし、講習を行ってみると、実際には教員側の意識の統一がなされていなかった。また、肝心の小学校英語教育を取り巻く状況に関しての知識も、部分的に不足していることが露呈する場面があった。これらは事前準備不足から生じた問題であり、否定できない反省点として次回に向けた大きな課題となった。25年度の講習はつぎのような構成であった。

山梨県立大学 国際政策学部 国際コミュニケーション学科

Department of International Studies and Communications, Faculty of Global Policy Management and Communications, Yamanashi Prefectural University

講習時間	科目名	
9:20～10:20 (60分)	オリエンテーション 講義：最新の第二言語習得理論の紹介	10:30～11:30 (60分) 講義：コミュニケーションの「素地」を養うために
10:30～11:30 (60分)	講義：英語の4技能習得法	11:40～12:40 (60分) 講義：「外国語活動」における国際理解教育
11:40～12:40 (60分)	講義：「外国語活動」における国際理解教育	13:30～15:00 (90分) ワークショップと討論①
13:30～15:00 (90分)	ワークショップ（模擬授業）と討論①	15:10～16:10 (60分) ワークショップと討論②
15:10～16:10 (60分)	ワークショップと討論②	16:30～17:00 (30分) 総合試験
16:30～17:00 (30分)	総合試験	
午前に講義（理論）、午後はワークショップ（実技）という構成で計画していた。ところが、実際には午後のワークショップが模擬授業までに至らなかったなど、当初の目標を達成することができなかった。実践的な部分を充実させるべく改善を模索することになった。 したがって、平成26年度は理論・実技の二部構成を継続しながらも、午後のワークショップにおいては模擬授業を必ず取り入れた内容とすることとした。また、各講義は担当者の専門分野に沿った形でかつ小学校英語教育の柱になるものに設定した。		講座1は第二言語習得と早期英語教育について、英語学（統語論）を専門に研究する教員が担当して行った。とくに子どもたちの文法の習得に関して詳しい説明がなされ、早期英語教育の効果を検討するものであった。講座2は英文学（英詩）を専門分野とする教員が担当することで、英詩／韻文に特有な英語のリズム、特にチャンツや歌を授業に取り入れる際のポイントとなる事項を紹介し、実例を取り入れて説明する内容となった。また、フォニックスに関する説明も含めて行った。講座3は国際理解について扱う内容とし、歴史記述・歴史認識の研究者が担当して外来語の歴史に関する講義を行った。いくつかの語(例: “history” 「歴史」)を取り上げ、新しい言葉は新しい思想・文化を背景に生まれてくることを説明した。そして、新しい言葉の概念を日本語として如何に翻訳し、日本人がどのように受容するかという点を述べ、新たな概念を受容するには既存の伝統的学問素養が大きな役割を占めていることを主張した。小学校での英語授業実践にも有用となる「外来語の定着」を扱う内容であった。このように、大学ならではのアカデミックな部分を残しつつ、小学校英語教育に役立つ講座を提供することを意識して午前の部を計画した。
9:20～10:20 (60分)	オリエンテーション 講義：第二言語習得と早期英語教育	

平成26年度の講座は、時間構成としては前回のパターンを踏襲するが、午前の講義部分で扱った事項を午後のワークショップで生かせるような有機的展開を試みることにした。したがって、午前の部においては、受講者である教諭の英語教育に対する意識改革を行い国際理解に新たな気付きを促しつつ、午後の部においては子どものコミュニケーションの素地を養うためのスキル・態度をはぐくむ教育を目指す具体的な方法をしようと計画した。ワークショップでは、ゲームや歌、チャンツ、英語劇を扱えるよう、その導入を午前の段階で実施することとした。また、外国語活動教材“Hi, friends!”を使用した授業実践のヒントを扱うことについては、現場の教員からの要望が多く寄せられるため、今回は“Hi, friends!”を使った英語劇の取り組みを提案した。

模擬授業にあたっては、担任が単独で授業を行う形、担任と日本人英語教師（またはALT）のペアで行う形、担任とALTのペアで行う形の3種類を取り入れてみることにした。準備の際には3名の受講者に対して2名の日本人教員、1名の英語を母語とする外国人教員の計3名が各受講者と詳細な打ち合わせができるように協力した。

25年度が受講者3名であったため、26年度は受講者の増加にも工夫が必要と判断し、日程の設定には現場教員からの意見聴取を行ない参考にした。結果的には26年度受講者は前年度と同様3名であった。少人数であるため、講義中心となる午前の部は会場を小さな会議室に変更して行うことにした。講習担当者と受講者がより接近して着席し、積極的な質疑を引き出しやすいセッティングを用意した。午後は実技が中心となるため場所を移し、模擬授業準備など順調にできるスペースを確保することとした。

2. 模擬授業

26年度の更新講習の重要な変更点としては模擬授業を必ず取り入れることにした。ここでは3種類の模擬授業についてまとめを行いたい。模擬授業とはいえ、時間の都合上、本来の授業の一部分を扱うようにした。受講者には1度ずつクラ

ス担任役を務めてもらい、クラス担任役以外の全員（受講者および本学スタッフ）が児童あるいはALT役を務めた。3種類の大まかな授業案を作成しておき、それを受講者に紹介した。受講者は本学スタッフとペアになったうえで、30分間で準備検討を行い、その後20分間の模擬授業を発表する形を取った。以下がそれぞれの取り組みの内容と課題である。

2-1. 歌・チャンツを取り入れて

この模擬授業では歌（／ゲーム）とチャンツを行った。本学からは英語ネイティブ・スピーカーの講師が担当した。クラス担任役の受講者はALT役の本学教員とペアティーチングをする形を取った。内容としては授業の導入部分で利用できるもの、あるいは朝活動等に活用できるものもある。

最初に行ったのは数字を使ったゲームである。午前に行った講義2を応用する意図のもとに取り入れた。ホワイトボードに1から7までの数字を書いた紙を貼り、最初にひとつずつの数字の発音を確認する。その後、歌を歌いながら数字を指し示す。曲は“One, two, three”である。うまくできるようになったら今度は逆回りで7から1までを指し示し、歌を合わせて歌う。さらに上級生向きの応用編としてはランダムに紙を並べ替える、あるいは紙を一枚抜くなどして変化をつけた。このアクティビティはおおむねスムーズに展開し、すぐに実践できるものと判断することができた。

二つ目はカタカナ英語と本来の英語の発音の違いを認識させることを目標としたチャンツである。これは異文化理解で扱った外来語との関連性を再確認するために取り入れた。たとえば「ケーキ」と“cake”など、日本人教員が対象物をカタカナ英語で言い、それを否定する形でALTが正しい英語の発音で同じものを言う。児童役の聴衆はALTの発音のあとを追って声に出して練習する。これをチャンツのリズムに乗せて行っていく。日ごろ当たり前前に使用している外来語が、もとの英語で発音された時には従来のカタカナ英語とは極端に異なって聞こえる場合があることを子

どもが気づけば大成功である。しかしこのチャンツに関しては、準備の時間が不足していたこともあってか、リズムに乗せることがまず困難であり、実際のところアクティビティの意図を児童役の受講者の一部が理解するに至らなかった。教師側としては容易に改善できるものであるがこそ、留意したい部分であると認識した。

2-2. 英語劇

ふたつめの模擬授業では“Hi, friends! 2”の桃太郎を使って英語劇上演の練習を行った。英語教育講座においては、外国語活動教材“Hi, friends!”の有効活用の方法を知りたいという要望が受講者から常に寄せられる。その声に応えるために桃太郎を取り上げるようになった。さらに、英語劇を授業で取り入れることは子どものモチベーションを高める効果が期待されるため、この模擬授業を取り入れた。本学からは演劇を専門とする教員がこの模擬授業を担当した。劇の準備に取り掛かる前に、具体的な注意事項として次の6点を説明し、共通理解を得ることとした。①セリフの工夫、②動きの工夫、③いろいろな配役、④小道具を用いるとき、⑤空間の使い方、⑥観客と一緒に楽しむ、のそれぞれのポイントは、担当者から次の通りに説明された。

第一に、セリフについては児童に明瞭な言葉を使わせるように指導を行う。これには発声がクリアであることと、ボリュームがあることの双方が含まれる。また、感情を込める練習としては、いろいろな言い方を教員または子どもが試して、一番よいものを選ぶことが望ましい。たとえば、桃太郎のセリフの中から何かひとつを選び、それを怒ったように言ったり、小さい声で言ったり、悲しそうに言ってみる。あるいは声のピッチを変えて、登場するキャラクターの特徴を表すこともできる。鳥や猿は高い声で、あるいは擬声語を取り入れてもよい。

つぎに、動きの工夫であるが、おじいさん、おばあさんは体を小さく見せ、鬼ならば大きく見せるのが良く、そのために手足を小さくあるいは大きく動かしてみせる。また、動物はそれぞれのイ

メージをうまく使えばよい。たとえば猿ならばすばしっこい動き方をしたり、犬ならば最初は四つんばいで出てきたりするのもしいだろう。また、鳥には特有の翼の動きを付け加えれば面白い。

さらには配役についてであるが、これは出演者の数や男女の内訳によっても工夫が可能である。何人の子どもたちを劇に出演させるかによっても配役の検討は必要になる。たとえば桃太郎を赤ん坊時代、子ども、大人で変えれば演じる役が増えることになる。工夫ができることは、桃太郎の赤ん坊時代を女子に演じさせたり、鳥を男子に、犬を女子になど、わざとイメージと違う配役にしたりするのもおもしろくなる。また、台詞を言う人と動作をする人を別にするとたくさんの子どもたちが出演できることになる。

つぎに小道具についてであるが、小道具は簡単に紙などで作ってもよいし、あるいは作らなくてもよいだろう。たとえば桃であればボールで代用できる。または桃太郎役がうずくまり、布をかぶる、その布を取ると桃太郎が現れる、というシンプルな表現も可能だ。効果音については、音の出る道具をうまく使えばよい。たとえば棒で床をたたくなどして、叩く音で動物の登場を知らせることができる。

空間の使い方としては、会場によって、つまりステージか教室かという違いがあるが、たとえばステージ上で発表をする場合は、客席の部分をうまく使うとよい。川をステージ下にしたり、鬼が島に行くまではステージ下で演じたりすることで別々の場所を表現する。会場が教室の場合には、教室の後ろと前両方を舞台にして、3匹のお供と一緒に客席の間を歩くのもよい。

最後に、観客と一緒に楽しむことの意義についてだが、観客が村人や鬼になったりすると、全員が劇に参加することになり、皆で一緒に楽しめるものになる。声を合わせてひとつの台詞をみんなで言ったり、鬼ヶ島から帰ってきた桃太郎たちを迎えるときにハイタッチ（あるいは犬とはロウタッチ）をしたりするとおもしろくなる。

以上のようなポイントを確認したうえで、受講者は30分間の準備に入った。模擬授業は、4時

間目の授業で、児童はある程度の取り組みをすでに済ませている段階と設定した。模擬授業の中では時間的制約があるため桃太郎の一部分を上演する練習を行うこととした。20分間の模擬授業の中では6点の注意事項を生かした指導がなされ、桃太郎の英語劇の一部分が首尾よく演じられた。他の劇にも応用が効くような内容の模擬授業となった。

2-3. コミュニケーション・アクティビティ

この模擬授業では、ローカルな題材を取り入れた。²⁾ 設定は旅行案内所で、山梨を訪れる外国人観光客と案内所で客を迎える側のスキットである。レベル的には6年生にふさわしく、中学校入学を前に英語の運用に自信をつけることにつながる取り組みにしたいという意図が含まれる。同時に子どもたちには地域の観光・文化について調査することになるため、社会科の地域学習との関連を持たせることも可能である。

山梨県では2013年に富士山が世界遺産に登録されたため、今後ますます外国人観光客の来訪が期待されている。富士山のほかにも、甲府市内の御岳昇仙峡には紅葉の季節を中心に外国人観光客が数多く訪れている。八ヶ岳高原や甲府盆地に広がるブドウ・モモの生産地も都心から日帰り観光が可能な人気のスポットになっている。宿泊を伴う場合には石和温泉郷がよく知られた宿泊地である。子どもたちに地域の観光資源について調べ学習をさせ、実際に役に立つ可能性がある英語をあわせて覚えさせるのがこのアクティビティの目的の一つである。

山梨県を訪れる外国人観光客を迎え、地元の名所・名物を英語で教えることができるようにするため、次の手順で指導を行う。

手順：

- ①観光客が目当てに訪れると考えられる山梨県の観光地を名産品などとセットで例として挙げる。たとえば富士山＋富士五湖＋吉田のうどん、昇仙峡＋ロープウェイ＋ほうとう、石和温泉＋県立博物館＋トリモツ、八ヶ岳高原＋清泉寮＋

ソフトクリーム、勝沼ぶどう郷＋ワイナリー＋ブドウ・桃、などを用意しておく。同じ山梨県内であっても、居住地域によって興味も異なることが考えられるため、子どもたちに素材を自由に提案させることもできる。

- ②ペア／グループごとにひとつ素材を決め、観光客に説明できるように詳しく調べる。スキットの原型を子どもたちに提示して、個々の題材に必要な項目を絞って調べさせる。（例：アクセス、名物とその特徴など）

- ③子どもたちは必要な英語表現をALTに聞きながら覚える

- ④観光リーフレットなど、レアリアを用意してスキットを行う

目標：

- ①円滑なコミュニケーションを進める基本的な表現を使う

Hello. May I help you? Yes, please.

Here you are. Thank you.

You are welcome. Have a nice day.

- ②地域の観光名所について調べて、それを英語で説明できるよう材料を準備する。

現実的に役立つ可能性が高い言語表現を身につける

- ③既習言語表現を最大限に生かす

例：

Hello. Good morning. May I help you?

Yes, please. I want to visit Mt. Fuji.

You can take a train from Otsuki Station.

It takes 50 minutes.

It's 1,000 yen.

Can I eat any local dishes?

What is that?

Do you have a map?

Yes, here you are.

Thank you. You are welcome.
Have a nice day.

基本的スキットの表現は次の通りである。

案内所スタッフ：Hello. Good morning. May I help you?

外国人旅行者：Yes, please. We want to visit (Mt. Fuji). How can we get there?

案内：You can take a (train) from (Otsuki Station). It takes (50) minutes.

旅行者：How much is the fare?

案内：It's (1,000) yen.

旅行者：Can we eat any local dishes?

案内：Yes, you can eat (Yoshida no udon) there.

旅行者：What is that?

案内：It's (a bowl of soup and noodles with meat and vegetables).

旅行者：Sounds good. What else can we do there?

案内：You can (visit Fuji Five Lakes. They are beautiful).

旅行者：Do you have a map?

案内：Yes, here you are.

旅行者：Thank you.

案内：You are welcome. Have a nice day.

旅行者：Thank you. Bye.³⁾

本講座における模擬授業での取り組み方は次のようであった。

①ペアを作る。(今回は4ペアができた。)

②ツーリストインフォメーションペア(2組：A富士山を案内するペア、B昇仙峡を案内するペア)と観光客ペア(2組)に分かれ、それぞれの表現を練習する。(ただし、実際に教室で行う場合には子どもがツーリストインフォメーションのみを担当し、ALTや担任が観光客に扮するというやり方もできる。)

③インフォメーションペアにはレアリアを渡しておく。

④相手とアイコンタクトを取りながら、明瞭に英語を話す練習を全員が行う。

⑤10分程度の練習を行ったあとで観光客ペアがツーリストインフォメーションを訪れてスキットを行った。

Aの富士山を案内するツーリストインフォメーションペアはつぎのスキット(太字部分)を練習した。カッコつき部分は相手(観光客ペア)の台詞である。

Tourist information A

Hello. Good morning. May I help you?

(Yes, please. We want to visit Mt. Fuji.
How can we get there?)

You can take a train from Otsuki Station.

It takes 50 minutes.

(How much is the fare?)

It's 1,000 yen.

(Can we eat any local dishes?)

Yes, you can eat Yoshida no udon there.

(What is that?)

It's a bowl of soup and noodles with meat and vegetables.

(Sounds good. What else can we do there?)

You can visit Fuji Five Lakes. They are beautiful.

(Do you have a map?)

Yes, here you are.

(Thank you.)

You are welcome. Have a nice day.

(Thank you. Bye.)

Bの昇仙峡を案内するツーリストインフォメーションペアはつぎのスキット(太字部分)を練習した。カッコつき部分は相手(観光客ペア)の台詞である。

Tourist information B

Hello. Good morning. May I help you?

(Yes, please. We want to visit Shosenkyo. How can we get there?)

You can take a bus from Kofu Station.

It takes 40 minutes.

(How much is the fare?)

It's 500 yen.

(Can we eat any local dishes?)

Yes, you can eat Iwana teishoku there.

(What is that?)

It's a grilled fish from the river served with miso soup and rice.

(Sounds good. What else can I do there?)

You can ride a cable car to the top of the mountain. There is a great view.

(Do you have a map?)

Yes, here you are.

(Thank you.)

You are welcome. Have a nice day.

(Thank you. Bye.)

観光客ペアは上記スキットのかっこの部分を練習するので、ここでの引用は省略する。

このアクティビティには、語彙の難しさという問題がついてまわるだろう。“It's a grilled fish from the river / served with miso soup and rice”の部分は、小学生には難しいのではないかという声が参加者から上がった。しかし子どもたちに文法を教え、理解させるわけではなく、「イワナ定食」に合った表現を知らせるのが意図である。また、スキットに使われるほとんどが既習表現だとしても、地域の食に関する語彙などが初出になるケースは避けられない。実際の生活の中で使える表現・語彙を扱うのが良いであろうとの判断から、今回はこのようなスキットを取り入れた。なお、この取り組みはCLIL（内容言語統合）型学習としてとらえ、さらに発展させることも可能であると考ええる。

まとめ

平成27年度に向けて、検討・改善が必要なポイントを再度概観しておく。将来の教員免許更新講習の位置づけや実施方法の変更には常にアラートでありたい。「新学習指導要領・生きる力」第4章の外国語活動、第3の5番目の項目はつぎのように記している。

指導計画の作成や授業の実施については、学級担任の教師又は外国語活動を担当する教師が行うこととし、授業の実施に当たっては、ネイティブ・スピーカーの活用に努めるとともに、地域の実態に応じて、外国語に堪能な地域の人々の協力を得るなど、指導体制を充実すること。

前半部分は現時点での教育現場の課題であり続けていると思われる。多くのクラス担任教師にとって外国語活動の指導計画の作成・授業実施が過重負担であることは否定できない。後半の授業実施に関する部分はすべての学校において実現されることが待ち望まれる。さらに、平成26年の英語教育の在り方に関する有識者会議報告においても、文部科学省の「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」（平成25年12月）の具体化のために、

小学校においては中学年から外国語活動を開始し、音声に慣れ親しませながらコミュニケーション能力の素地を養うとともに、ことばへの関心を高めるべきだとの方針が発表されている。さらに、高学年では身近なことについて基本的な表現によって「聞く」「話す」の2技能に加え、「読む」「書く」の態度の育成を含めた4技能を使ったコミュニケーション能力の基礎を養うとされた。また、学習の系統性を持たせるため教科化する方向性も提案されている。

そして将来的には受講者数の増加が望めるような環境・日程での講座開設がまずは検討されるべきである。内容の面では、早急に26年度から大幅な変更が必要とされる部分があるとは判断されない。しかし個別の講座においては受講者の要望

に対応するため最新の情報を提供できるようにしなければならぬのは当然である。現場教師から日頃より情報を得ておくなどし、私たち講座担当者側としても、小学校英語教育に関する理解の向上、アクティビティ・模擬授業部分の充実を実現するための研さんを重ねていくべきである。

注

- 1) 免許更新講習を行うのに先立って、平成24年度山梨県立大学地域研究交流センター研究プロジェクトとして「山梨県内の小学校英語教育における指導者の養成と研修に関する研究」に取り組み、その一環で4日間にわたる「小学校英語教育指導者トレーニングプログラム」を企画し実施した。免許更新講習はその経験を生かして計画したものである。
- 2) 地域の身近な事柄を授業に取り込むことで、さらにもどもの興味を引くことが期待される。各地で地元の題材を取り入れた活動が行われている。たとえば、静岡県の昔ばなしを使った外国語活動の指導例もある。
http://www.center.shizuoka-c.ed.jp/shizuoka_guideline/05eigo/05-05-02.pdf
- 3) 本スキットは“Hi, friends!” で使われる表現を極力取り入れながら、筆者が試験的に作成したものである。